

「また来ます」の思いを届けに

～ボランティアの現場から～

喜久里彩芳（法学部3年）



共に活動した福岡女学院看護大の皆さんと。(右側が中大、左側が福岡女学院看護大)＝撮影・日本ホスピス在宅ケア研究会



面瀬仮設の集会所。住民の方々のつながりを育む場となる
＝撮影・宮崎汐里さん(文学部3年)

8月の下旬、私はいつもお世話になっている気仙沼市の面瀬(おもせ)地区にある仮設住宅へ向かった。夏の気仙沼を訪れるのは初めてだったため、想像以上の暑さに驚いた。それでも、海から吹く爽やかな風に当たると、心地よい気持ちになった。

今回の活動は5日間。それぞれに目標を持って集まった、学年と学部を超えた6人で仮設住宅を訪問した。ボランティア経験に乏しい私たちであるが、住民の方々の温かさに触れながら、現地のスタッフの指導のもと、朝夕のミーティングでの目標設定と振り返りのサイクルを通して、各々学びを深めていくことができた。

ハッとした先輩の言葉

私が初めてボランティアとして気仙沼を訪れたのは、2011年の12月に遡る。その年の3月に震災が起こってからというもの、多くの大学生がボランティアのため東北へ向かっていった。大学1年だった私は「自分も何かしなくては」と思う一方で、「自分が行って何ができるのだろう」と考えてしまい、なかなか行動に移せずしていた。

そんな中、出会ったのが、この面瀬の仮設住宅での活動だった。現地の看護師スタッフとともに、仮設住宅という「地域」とそこに住む「人」を見守る。地域社会に関心があったこと、そして、住民の方と直接的な関わり合いが持てるということに惹かれた。「住民の方とお話をするのなら、私にもできるかも」。そんな気持ちもあって、ようやく12月になってボランティアへの参加を決めた。

とはいえ、ボランティアを始めてみると、上手いかないこと、壁にぶつかることばかりだった。私たちの活動の主な内容は、集会所、時にはお宅に訪問して、みなさんと関わることである。いざ、住民の方を前にしたときに、どんな「言葉かけ」をしたらいいのか分からず、戸惑うばかりだった。かえって住民の方に気を遣って頂いているようで、ボランティアに来たにもかかわらず、現地で自分が何かできているという実感はまるでなかった。

こうして悩んでいるとき、現地に常駐するスタッフの方から「ボランティアは押し付けてはならない」という言葉をかけられ、ハッとする思いがした。そこで私は自分の「何かをしてあげたい」という気持ちを満たすことを考えながら、住民の方と接していたことに気づいた。私たち

は住民の方々が受け入れてくださって初めてボランティアができる。自分の気持ちを押し付けるのではなく、寄り添うことで、相手が必要としているものを言葉だけでなく、表情、身振り手振りからくみ取っていかねばならない。自分のボランティアに対する考え方が180度変わった。

今では、仮設住宅で活動をしていても、「ボランティアとして何かをしてあげる」という感覚はない。むしろ、住民の方々に温かく受け入れられ、共に時間を過ごすなかで、自分自身が成長させてもらっていると感じている。相手に寄り添うことは簡単なことではなく、正解が見えることはないけれども、「相手を分かってもらう自分」で居続けることは忘れないようにしている。

そんな自分が唯一自信を持って行動していることがある。それは、継続して活動することだ。何度も仮設住宅に足を運び、住民の方に会いに行くということが、「被災地を忘れていない」という安心感につながってくれたらと思っている。震災から2年半が経つ今、被災地は日々、人々の心から遠ざかっているように感じる。だからこそ、「また来たよ」の思いを届けに、これからも気仙沼に向かうつもりだ。

2600人のはまらいんや踊り



5日間の活動後に訪れた「第62回気仙沼みなとまつり」の様子
＝撮影・喜久里彩芳

5日間の活動が終わった後、「気仙沼みなとまつり」の会場へ向かった。私たちが到着したころ、市内の51団体、総勢約2600人による「はまらいんや踊り」が行われていた。

それぞれに個性の光る衣装を纏って、夕方からおおよそ3時間もの間、声からしながら踊り続ける。「はまらいんや」が気仙沼の方言で「一緒に～しませんか?」を指すように、彼らの歌と踊りとその笑顔に、沿道の私たちもつい一緒に踊りだしたくなってしまふ。「楽しくってしょうがない!」という気持ちが充満していて、気仙沼の人々のもつエネルギーを存分に感じた時間だった。



港では大迫力の打ちばやしも行われた＝撮影・喜久里



学生記者になりませんか?

『HAKUMON Chuo』は中大生が取材・編集する大学広報誌です。
現在、学部在学学生を対象に学生記者を募集しています。

- 元新聞記者のプロや先輩の学生記者に、
取材方法・原稿の書き方はじめ
添削指導を基礎から受けることができます。
将来どんなキャリアをめざすにも文章力が重要です!
- 取材を通して、さまざまな人に出会うことができます。
出会いの数ほど思い出ができることでしょう。
- 記者活動を通してコミュニケーション能力など
「社会人基礎力」を身につけることができます。



世界のトップを目指す陸上競技・飯塚選手を取材する学生記者たち

お申し込み・お問い合わせ 中央大学広報室『HAKUMON Chuo』 編集担当：久保田茂信
Phone：042-674-2048(直通)
E-mail：skubota@tamajs.chuo-u.ac.jp